



赤十字の父 アンリ・デュナン 第二回

講演師 一龍齋貞花

世界中にデルタ株蔓延。パンデミックは収束せず治療に当る医療関係者は休まる暇がありません。感染症だけでなく、災害負傷者の治療に従事する赤十字、世界各国に赤十字が組織されています。

この赤十字の提唱者がアンリ・デュナンです。先にナイチンゲールを紹介しましたが、赤十字の父にお付き合ひ下さい。

アンリ・デュナンは、一八二八年五月八日、スイスのジュネーブで誕生。徳川十一代将軍家斉の時代。父は貴族で政治家。

「お父様、お母様九歳の誕生日プレゼントを孤児院の子ども達にあげたいと思います」

母のアントワネットは、養老院や孤児院へ奉仕する慈善事業に精を出していま

すから大賛成。

やがて宗教家カルバンの創立した学校に入り、キリスト教を信仰する青年に成長したアンリは、志を同じくする友人達と「愛の突撃隊」を結成。

「貧しさのため飢えや病気で苦しんでいる人が沢山います。又身寄りのない老人や孤児が寂しい毎日を過ごしています。こうした人達に愛の手を差し伸べてほしいのです。貧しさと不幸を無くすための僕達の運動に是非参加して下さい」
恵まれない人々を慰問して歩いた経験から、なにが必要なのか判っていた。

学校を中退しフランスの銀行に就職。仕事の合い間をぬって運動を続け、ジュネーブにYMCAキリスト教青年会支部が出来るや、ジュネーブ代表としてフランスや、ベルギー、オランダにも出掛け

各国の会議に出席。

勤めている銀行が、フランスの植民地アルジェリアの農業開発に力を入れていた、そのアルジェリアに出張。

「地の果てといわれるアルジェリアは想像以上に荒れ果て、多くの人が栄養失調にかかり、子どもはやせ細っている。この人達をなんとか救ってあげたい。荒れ果てた砂漠に木を植え、やせた土地を改良しなければいけない」

知人のドイツ人ニックを通じて八町歩の土地を買い、製粉会社を作り職を与え幸せになつてもらおうと銀行を退職。

資金は親類、友人、知人から借り、最新式の水車と四階建の会社を建て、機械も最高のものを注文。ところが水車を廻すための水と、穀物を収穫するには六〇〇町歩の土地が必要。水や土地はフランス政府が握っているので許可が必

要。植民地官僚はやる気なく提出書類も

ほったらかしで本国政府に伝えようとしていない。使用人もアラブ人気質で金が入れば仕事はせず酒びたり。

ニックの甘い言葉にのせられて無駄な投資で資金は減るばかりで、借金を重ねる始末。

パリへ出掛け大臣を訪問するもらちがあかない。

「どうしても水が欲しいのです。アルジェリアのために水を使わせて下さい」
「望みを叶えるには、皇帝に会って頼んでみるんだな。皇帝はイタリアの戦場にいるんだ」

イタリアへオーストリア軍が攻め込み、イタリアを助けてフランスが参戦、十九世紀最大といわれるイタリア統一戦争の真最中。

「皇帝に会ってお願ひするのが一番の早道。アルジェリアのためにも会社のためにもなるんだ」

戦場へ行くのは無茶だという周囲の反対を押し切つて、激戦地ソルフェリーノへと馬車を走らせる。

「ソルフェリーノの戦い」

轟き渡る銃砲の音、両軍の挙げる雄叫びは天にこだまし、地をくつがえさんばかりの有様。

小高い丘に陣取つたオーストリア軍に狙い撃ちされバタバタ射ち倒される兵士、犠牲者をものともせず激しく攻め立てる仏・伊連合軍の攻撃に、退却をはじめめるオーストリア軍。

ソルフェリーノの丘には敵味方の区別なく兵や馬が折り重なつて倒れている。退却したオーストリア軍の陣地に教会を利用した野戦病院があり、負傷兵は床にも廊下にもあふれウメキ声と血の匂い。

「水、水をくれ」

御者に手伝つてもらい近くの井戸から水を汲んできて次々と飲ませてやる。と、突然ダダダ・・・と銃声が。

フランス軍が、野戦病院と知らずに攻撃してきた。

咄嗟にアンリは、棹の先にハンカチを結んで尾根に登り、

「撃つな、ここは野戦病院だ。この野戦病院には、フランス軍とオーストリア軍の負傷兵がいます。手当をすれば助かる人が沢山います。どうか医者をお願いします」

「敵を助ける必要はない」

「そんな、敵も味方もありません同じ人間です。傷つき死のうとしている人を見捨てることは出来ません。お願いです。助けてあげて下さい。」

余りの多さに死骸の処理も進まず、町中に悪臭がただよい、腕をもがれ足は吹っ飛び顔の肉はえぐられ、膿んだ傷口にうじがわいているという目も当てられない有様。

アンリは、町の婦人達に、

「負傷兵を助けましょう。どうか手伝つてください」

呼び掛けて歩き、熱心な呼び掛けに応じて数人の婦人が救護隊をつくり、アンリと一緒に看護を始めた。

「奥さんやお子さんが、お父さんの帰りを待っていますよ。これくらいの怪我

に負けてはいけません」

婦人たちの優しい看護に、兵士達は元気を取り戻していきました。

敵も味方も区別はありません。水を与え包帯を取り替え、スープにひたしたパンを食べさせる。

だがわずかな医者では手が廻らない。手当が行き届かず次々と死んでいく負傷兵。

「医者が足りない。医者がいれば命が助かるのに」

オーストリア軍の捕虜の中に何人もの医者があることが判り、治療に当らせようとしたが、軍隊の規則で捕虜を自由に歩かせてはいけないという。

「アルジェリアの司令官マクマオン将軍に面会しお願ひしよう」

皇帝に会つて水と土地の権利を貰うために戦場へやってきたが、多くの負傷兵を目にした途端、総てを忘れて救護活動に乗り出したアンリは、将軍を追つて戦場の中馬車を走らせ、やっとのことで将軍に面会。

「判つた。私から皇帝に頼んで敵軍の医者を開放し治療に当らせることにしよう。君が危険な戦場で負傷兵達の救護活動を続けておられることは報告を聞いて

知っていました。感謝しています。今後もよろしくお願ひします」

将軍の進言により、皇帝は、

「捕虜の医者や衛生兵を総て釈放し負傷兵の治療に当らせ、任務が終わり次第帰国させてよい」

と、全軍に通達。捕虜になつていた医者達は大喜びで治療に当りました。

アンリの「みんな同じ人間」という気持ちで皇帝の心を動かしたのです。

アンリは救護活動の合い間をぬつて、パリやジュネーブの新聞社にせつせと手紙を書き、

「イタリヤの戦場の悲惨な様子を報告し、地元の人達が敵味方の区別なく救護に当たっていることを報せると共に、戦争が起こつたら負傷者を看護出来るように、戦争のない時から備えておけないだろうか。その救護のための団体は、献身的で訓練を受けたボランティアで組織されなければいけない」

これこそ赤十字創立への第一歩となり、大きな反響を呼びジュネーブやパリで救護組織が作られ、資金や物資の募集運動が始まつたのです。

アンリが先頭に立つて赤十字創立への働きは次回連続に申し上げます。